

Ⅱ 地域の特徴

- 1 65歳以上の割合が地域によって違うのは？
- 2 経営耕地面積の減少率が地域によって違うのは？



II 地域の特徴

1 65歳以上の割合が地域によって違うのは？

基幹的農業従事者数に占める65歳以上の割合は、地域により大きな違いがある。
道東(酪農)・道北と道東(畑作)の65歳以上の割合は全道平均に比べて低く、道央、道南の65歳以上の割合は高い。(図1、2)
ここでは、その要因を探る。

図1 基幹的農業従事者数に占める65歳以上の割合区分別の市町村別分布

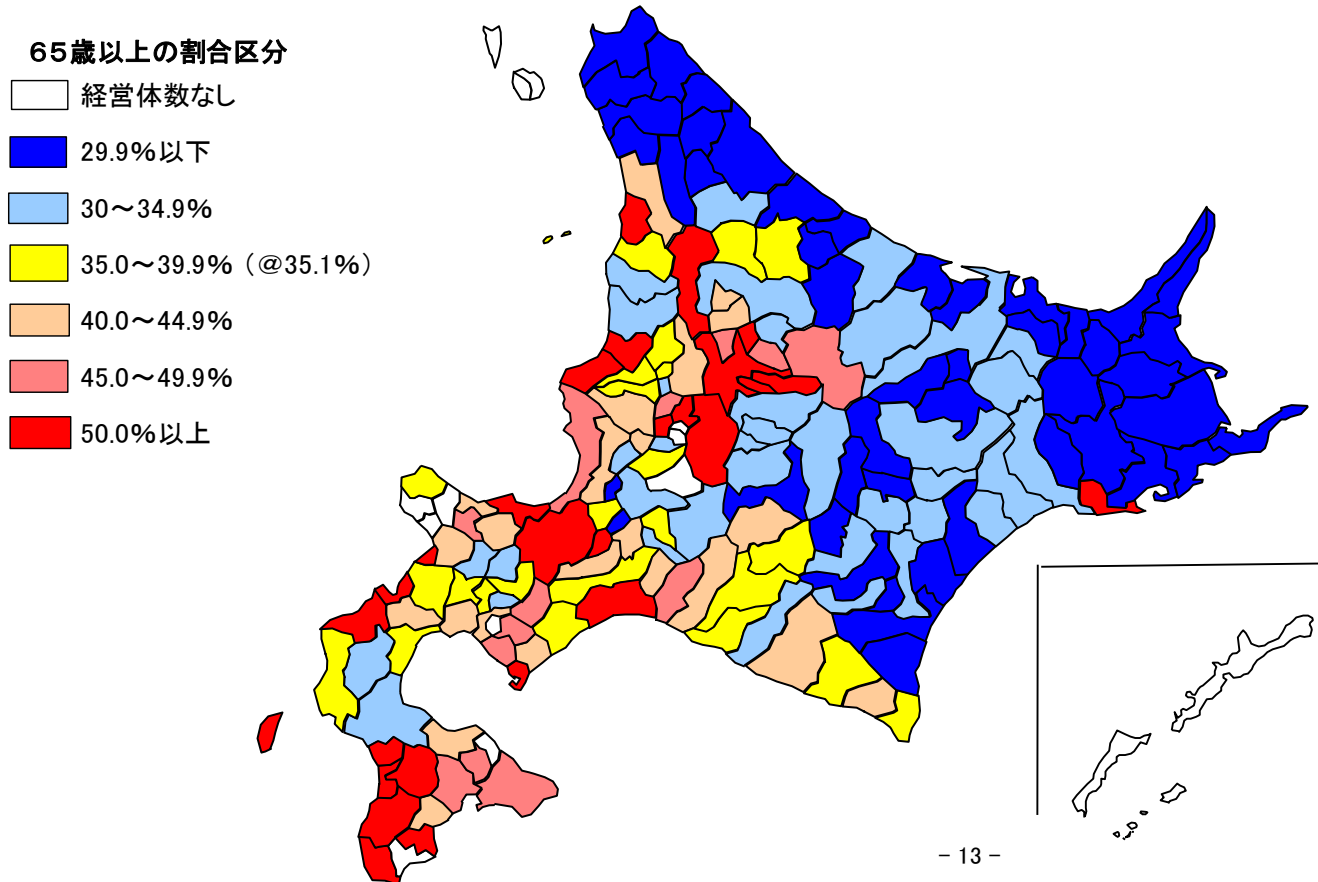
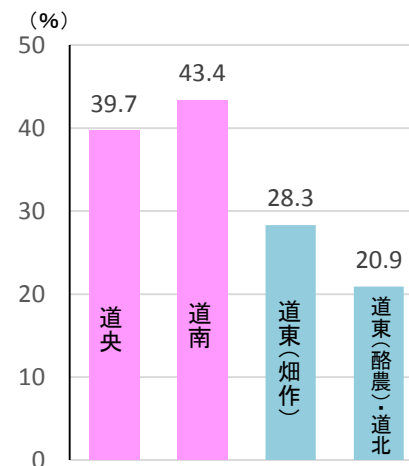


図2 基幹的農業従事者数に占める65歳以上の割合

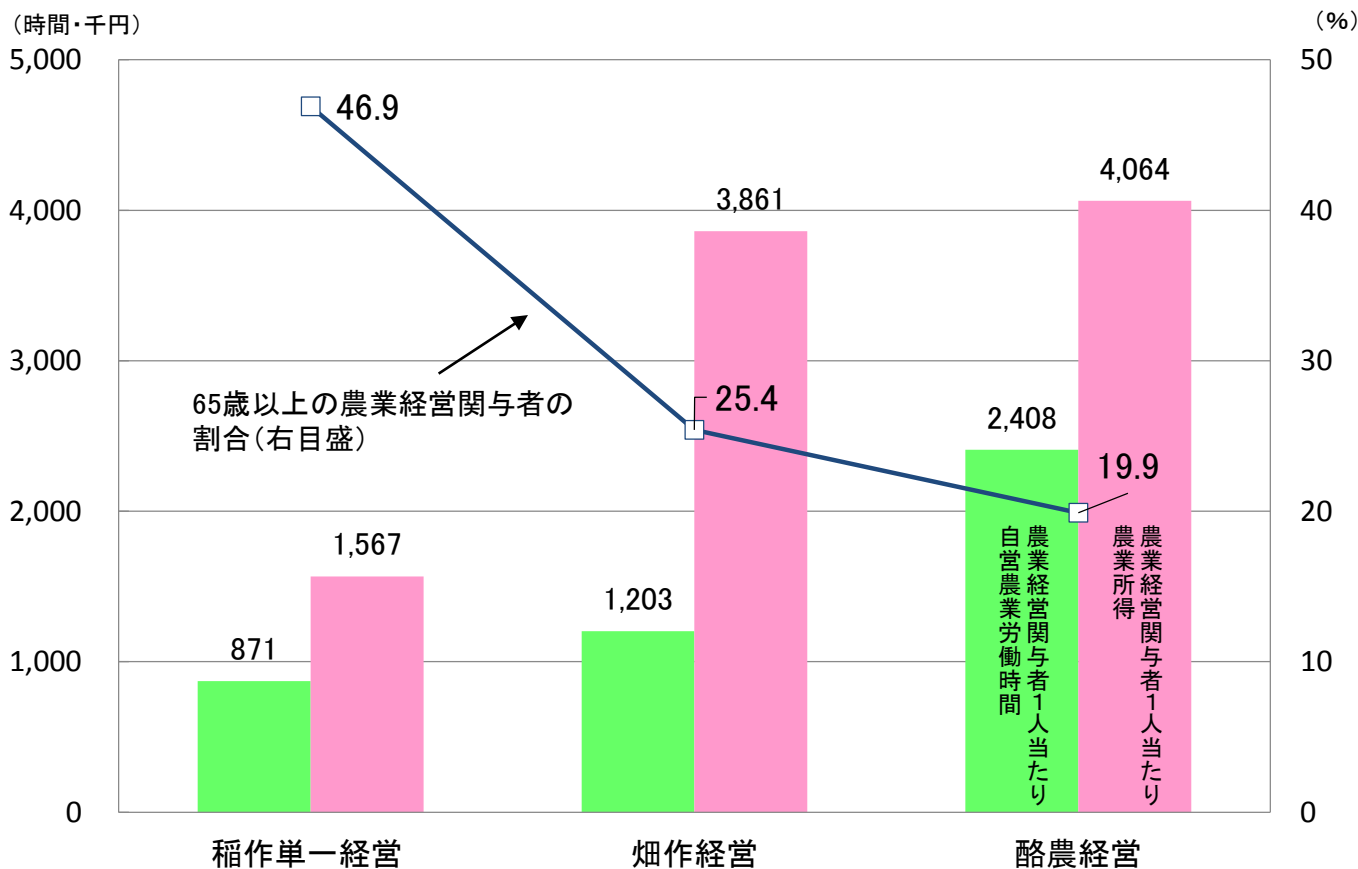


1. 酪農経営は、65歳以上の割合が低い。

農業経営統計調査の結果をみると、

- 稲作単一経営は、農業経営関係者1人当たり自営農業労働時間及び農業所得が他の経営に比べて少なく、65歳以上の農業経営関係者の割合が高い。（稲作は道央、道南で盛ん）
- 畑作経営の農業所得は酪農経営と同程度。65歳以上の割合は稲作単一経営の5割強。（道東(畑作)で盛ん）
- 酪農経営は、自営農業労働時間及び農業所得が他の経営に比べて多く、65歳以上の割合が低い。（道東(酪農)・道北、道東(畑作)で盛ん）

図 個別経営体の営農類型別の農業経営関係者1人当たり自営農業労働時間、農業所得と65歳以上の割合



資料：農林水産省「農業経営統計調査 営農類型別経営統計(平成26年)」 - 14 -

【用語の解説】

1. 個別経営体
農業経営体のうち「世帯」による農業経営を行う経営体
2. 営農類型
農業経営体を、「営農類型の分類基準」に該当する農業経営体ごとに分類。ここでは、以下の経営を計上。
 - ①稲作単一経営
水田作経営(稲、麦類等の水田で作付けした農業生産物の販売収入が他の営農類型の農業生産物販売収入に比べ最も多い経営)のうち、稲作の販売収入が80%以上を占める経営
 - ②畑作経営
麦類、豆類、いも類等の畑で作付けした農業生産物の販売収入が他の営農類型の農業生産物販売収入に比べ最も多い経営
 - ③酪農経営
酪農の販売収入が他の営農類型の農業生産物販売収入に比べ最も多い経営
3. 農業経営関係者
農業経営主夫婦及び年間60日以上農業に従事する世帯員をいう。ただし、15歳未満及び高校、大学在学中の者を除く。

2. 経営耕地面積、販売金額、農業従事日数の多い道東(酪農)・道北、道東(畑作)は、65歳以上の割合が低い。

農林業センサス結果を地域別にみると、

- 1経営体当たり経営耕地面積の大きな道東(酪農)・道北、道東(畑作)は、65歳以上の割合が低い。(図1)
- 販売金額の多い(3,000万円以上)経営体数の割合が高い道東(酪農)・道北、道東(畑作)は、65歳以上の割合が低い。(図2)
- 農業従事日数の多い(250日以上)経営体数の割合が高い道東(酪農)・道北、道東(畑作)は、65歳以上の割合が低い。(図3)

図1 経営耕地のある農業経営体の1経営体当たり経営耕地面積と65歳以上の割合

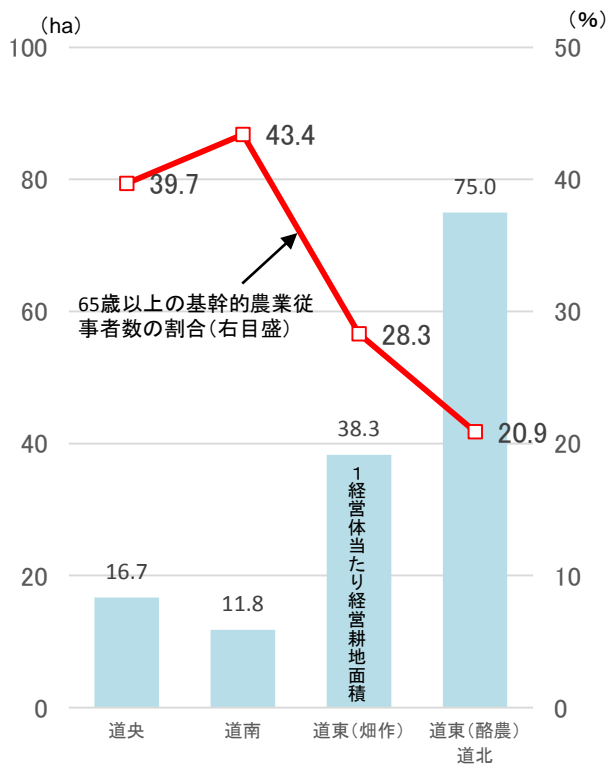


図2 販売金額階層別の経営体数割合と65歳以上の割合(販売農家)

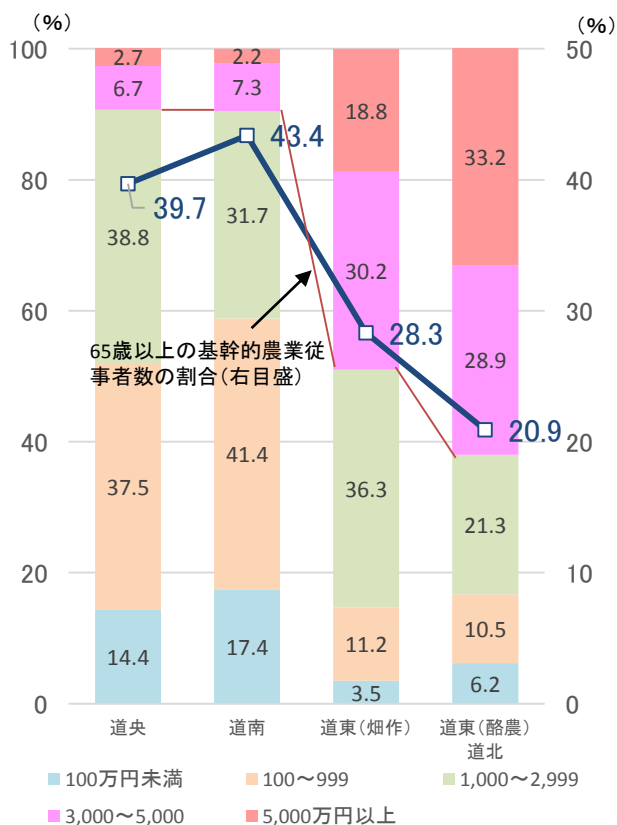
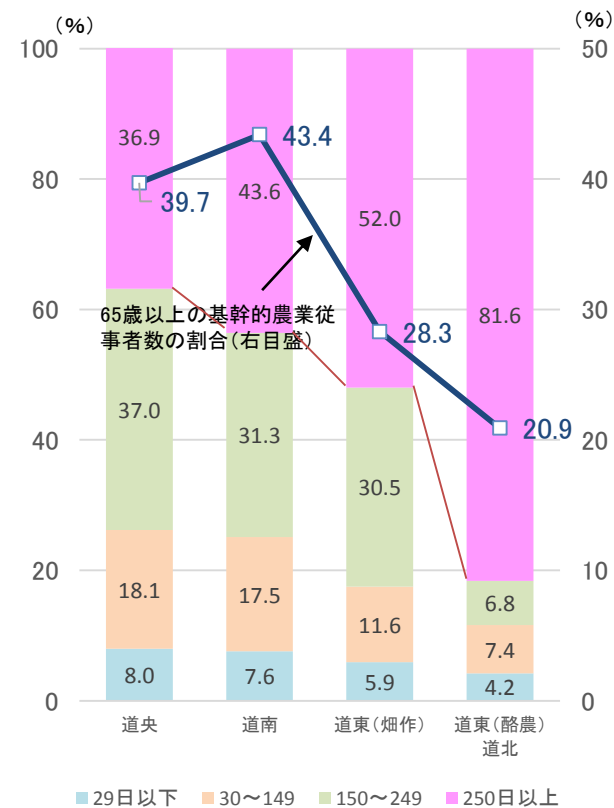


図3 自営農業従事日数別従事者数割合と65歳以上の割合(販売農家)



II 地域の特徴

まとめ ー経営規模が大きく、販売金額・所得も多い道東(酪農)・道北、道東(畑作)は65歳以上の割合が低いー

- 営農類型別経営統計(個別経営)結果をみると、道央、道南で盛んな稲作単一経営は、農業経営関与者1人当たりの農業労働時間及び農業所得が少なく、65歳以上の割合が高い。一方、道東(酪農)・道北で盛んな酪農経営は、農業労働時間・農業所得が多く、65歳以上の割合が低い。
- 農林業センサス結果をみると、①1経営体当たり経営耕地面積が大きく、②販売金額の多い経営体数の割合が高く、③農業従事日数の多い経営体数の割合が高い、道東(酪農)・道北、道東(畑作)は、65歳以上の割合が低い。

以上のことから、経営規模が大きく、販売金額・所得も多い、酪農中心の道東(酪農)・道北や、畑作複合経営が中心の道東(畑作)では、65歳以上の割合が低く、稲作の割合の高い道央や、稲作、野菜作、果樹作など多様ではあるが、経営規模の小さな道南では、65歳以上の割合が高くなっている。

【道央】

【65歳以上の基幹的農業従事者数の割合】 39.7%
【1経営体当たり経営耕地面積】 16.7ha
【販売金額3,000万円以上の割合】 9.4%
【従事日数250日以上の割合】 36.9%
【主な経営】 稲作、野菜作、軽種馬等

【道東(酪農)・道北】

【65歳以上の基幹的農業従事者数の割合】 20.9%
【1経営体当たり経営耕地面積】 75.0ha
【販売金額3,000万円以上の割合】 62.1%
【従事日数250日以上の割合】 81.6%
【主な経営】 酪農

【道南】

【65歳以上の基幹的農業従事者数の割合】 43.4%
【1経営体当たり経営耕地面積】 11.8ha
【販売金額3,000万円以上の割合】 9.5%
【従事日数250日以上の割合】 43.6%
【主な経営】 稲作、野菜作、果樹作、肉用牛等

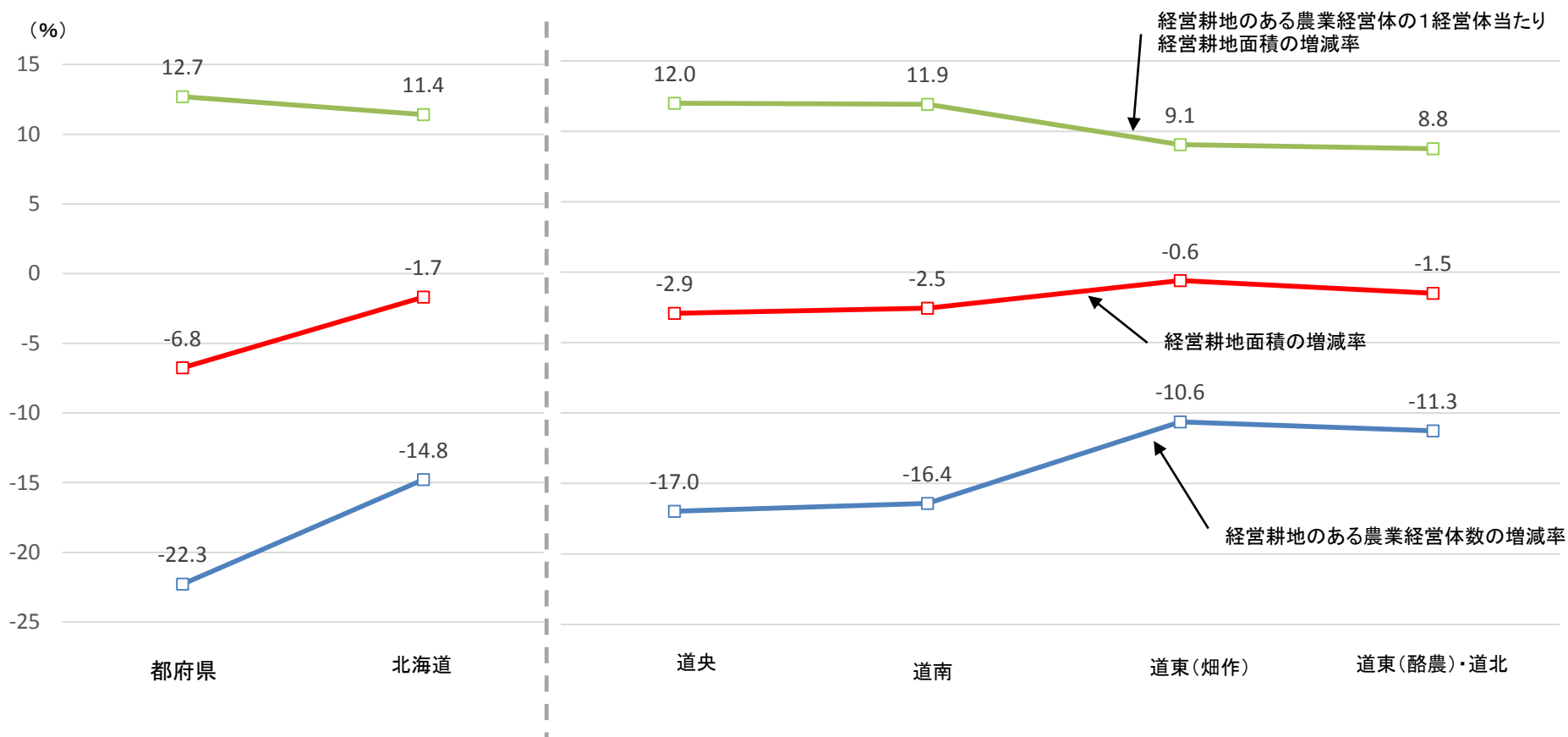
【道東(畑作)】

【65歳以上の基幹的農業従事者数の割合】 28.3%
【1経営体当たり経営耕地面積】 38.3ha
【販売金額3,000万円以上の割合】 49.0%
【従事日数250日以上の割合】 52.0%
【主な経営】 畑作、野菜作、酪農、肉用牛等

1. 道央、道南は農業経営体数の減少が大きく、経営耕地面積の減少率も高い。

- 北海道は都府県に比べ経営体数の減少率が低く、経営耕地の減少率も低い。
- 地域別にみると、道央、道南は1農業経営体当たり経営耕地面積の増加率は高いものの、農業経営体数の減少率が高く、経営耕地面積の減少率も高くなっている。

図 経営耕地面積等の増減率(2010年から2015年)



2. 増減分岐点からみた増減の特徴

面積規模階層区分ごとに、2010年から2015年にかけての増減率を算出し、その増減分岐点を基準とした各地域の増減率の違いを探る。具体的には、

1. 増減分岐点を境とした面積規模階層区分ごとの減少率、増加率等の特色をみる
 2. 増減分岐点を境とした面積規模階層区分ごとの面積分布や累積値の特色をみる
- ことにより、面積規模階層区分ごとの増減率と面積の分布等の関連により各地域の増減の特徴を分析する。

【参考】 － 都府県：5.0ha以下の規模階層の減少率が高く、面積割合も過半を超える －

1. 増減分岐点は「5.0ha」。分岐点以下の減少率は21.3%で、増加率を6.4ポイント上回っている。(図1)
2. 「5.0ha」以下の規模階層に属する経営耕地面積の割合は約6割。(図2)

増減分岐点を基準とした減少率が増加率を上回っていて、分岐点以下の面積も約6割と過半を超えているため、減少率が高い。

図1 階層区分ごとの経営耕地面積の増減率(2010年から2015年)

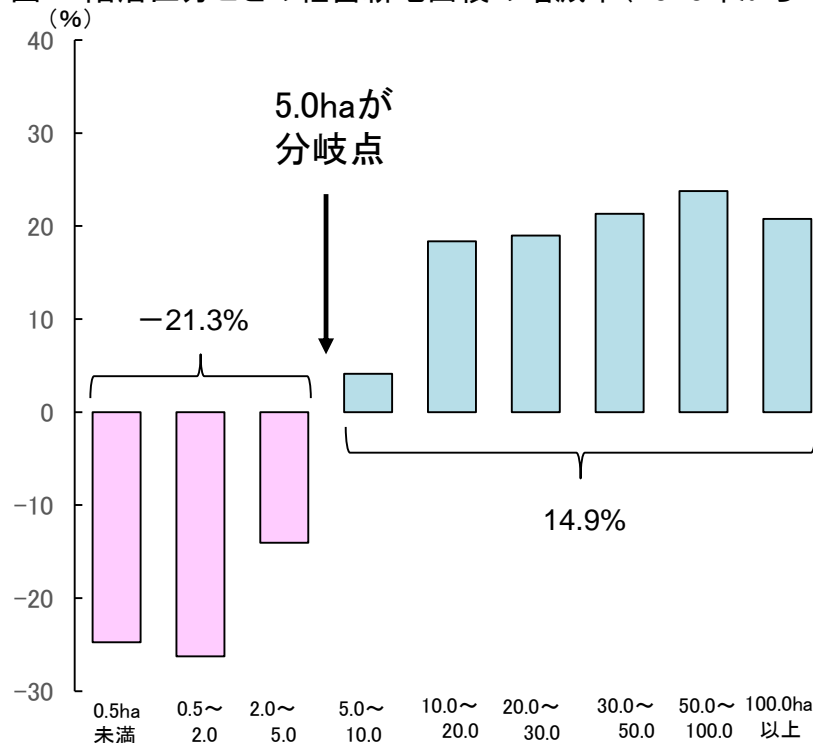
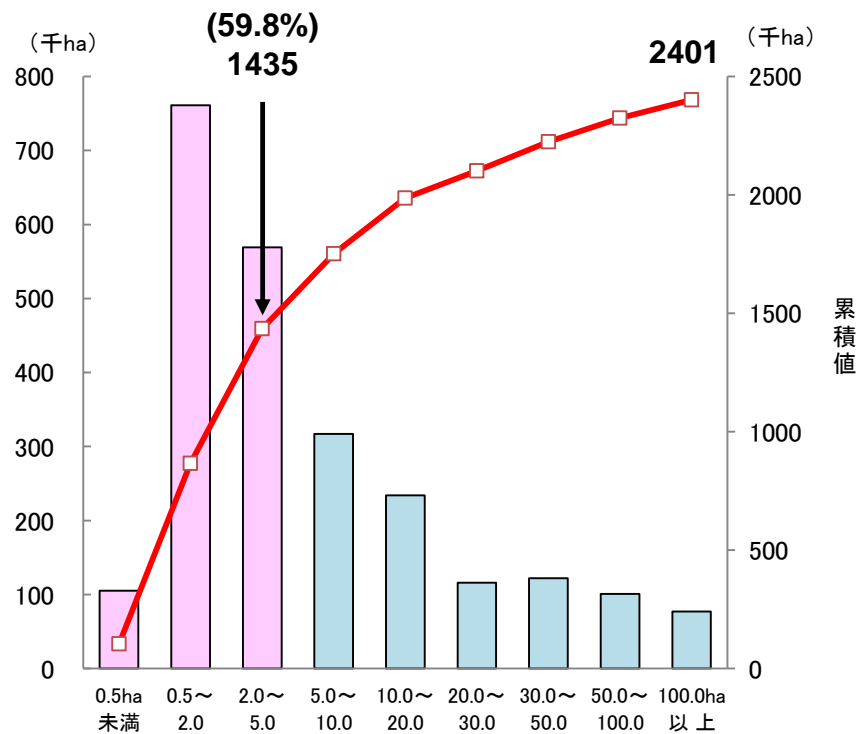


図2 階層区分ごとの経営耕地面積と累積値



－ 2 経営耕地の減少率が地域によって違うのは？ －

2. 増減分岐点からみた増減の特徴(つづき)

－ 道央：20ha以下の規模階層の減少率が増加率を大きく上回る －

1. 増減分岐点は「20.0ha」。分岐点以下の減少率は20.8%で、増加率を14.1ポイントと大きく上回っている。(図1)
2. 「20.0ha」以下の規模階層に属する経営耕地面積の割合は約3割。(図2)

増減分岐点を基準とした減少率が増加率を大きく上回っているため、分岐点以下の面積は約3割であるが、減少率が高い。

図1 階層区分ごとの経営耕地面積の増減率(2010年から2015年)

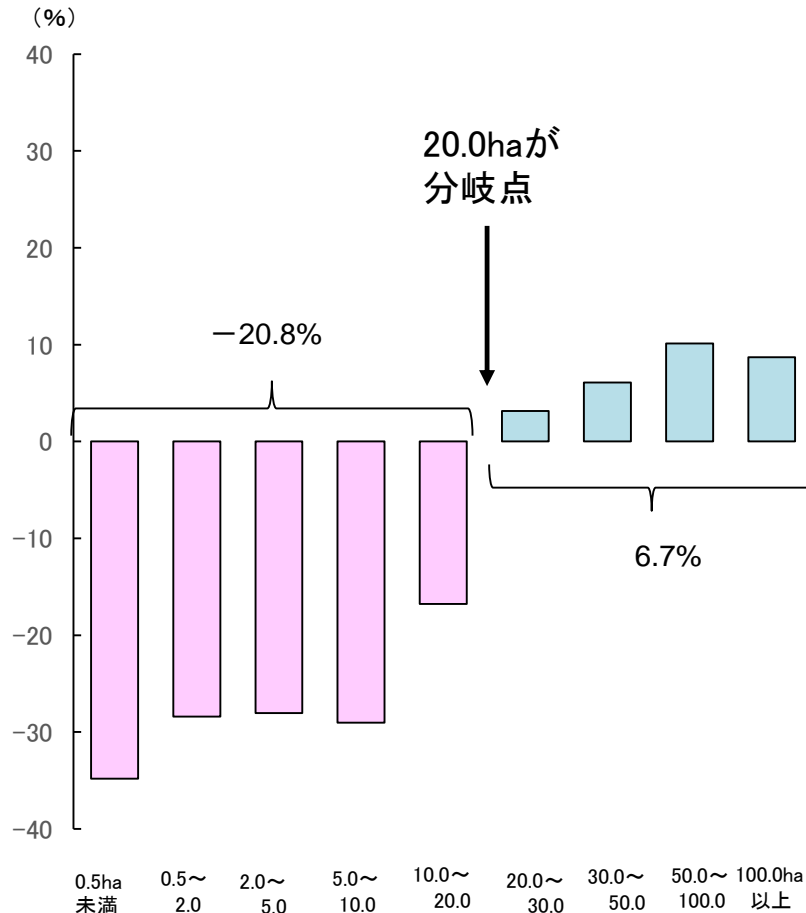
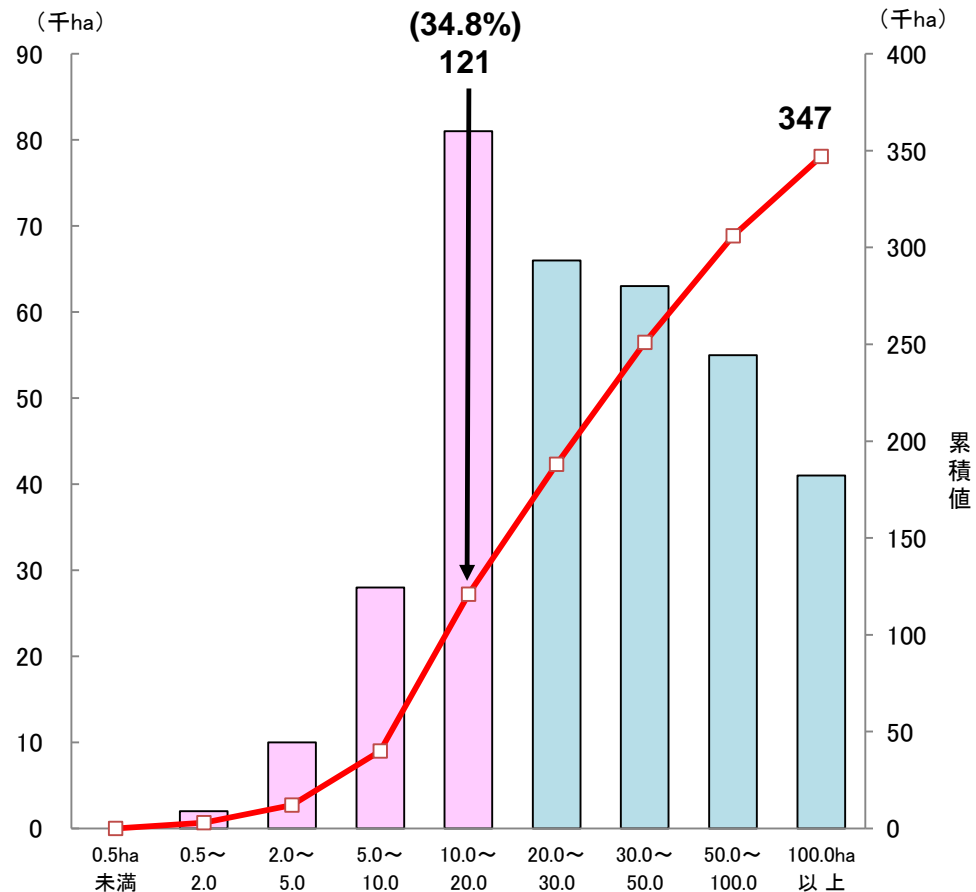


図2 階層区分ごとの経営耕地面積と累積値



－ 2 経営耕地の減少率が地域によって違うのは？ －

2. 増減分岐点からみた増減の特徴(つづき)

－ 道南：30ha以下の規模階層の減少率が増加率を上回り、面積割合も5割以上 －

1. 増減分岐点は「30.0ha」。分岐点以下の減少率は14.7%で、増加率を2.4ポイント上回っている。(図1)
2. 「30.0ha」以下の規模階層に属する経営耕地面積の割合は5割を超える。(図2)

増減分岐点を基準とした減少率が増加率を上回っていて、分岐点以下の面積も5割を超えているため、減少率が高い。

図1 階層区分ごとの経営耕地面積の増減率(2010年から2015年)

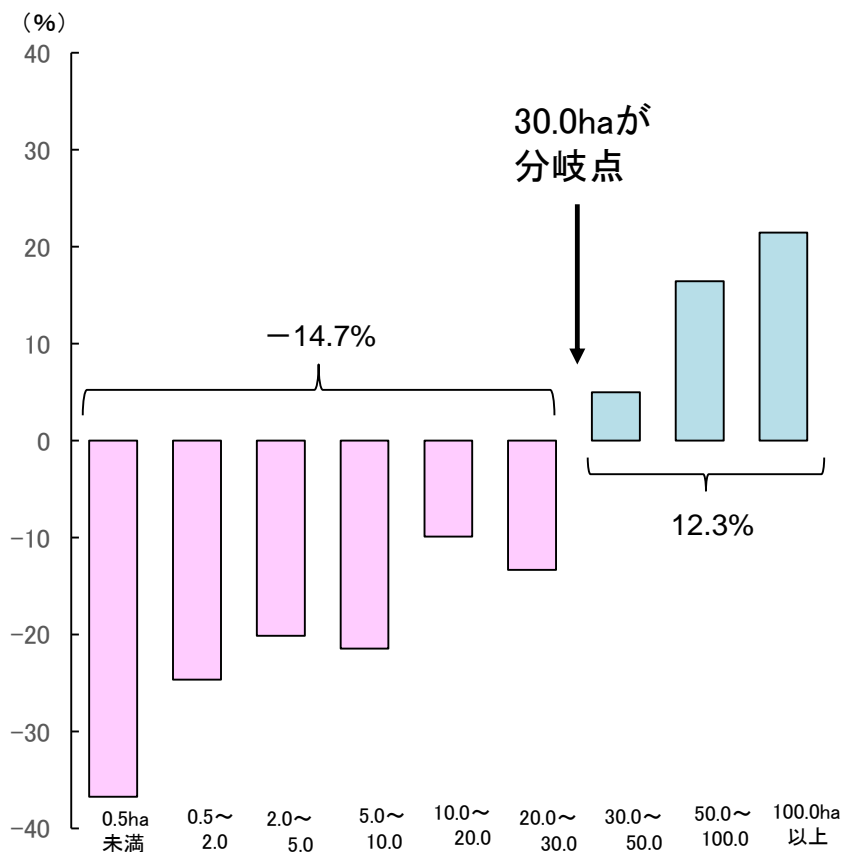
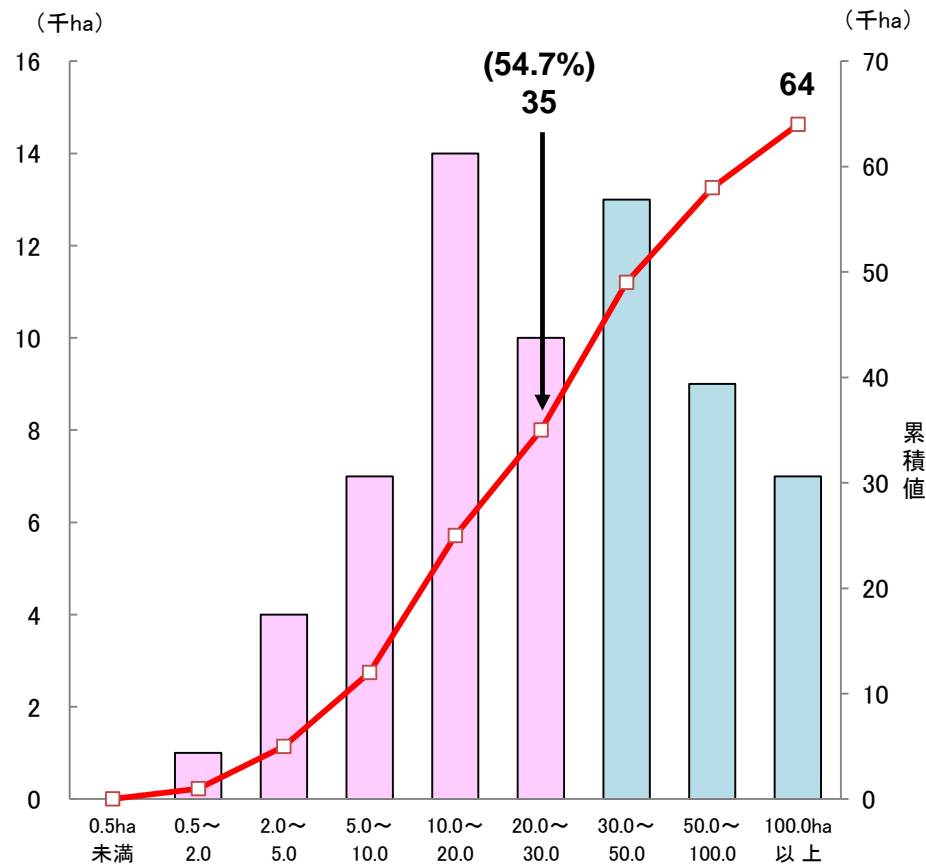


図2 階層区分ごとの経営耕地面積と累積値



－ 2 経営耕地の減少率が地域によって違うのは？ －

2. 増減分岐点からみた増減の特徴(つづき)

－ 道東(畑作) : 50ha以上階層の増加率が減少率を上回る －

1. 増減分岐点は「50.0ha」。分岐点以上の増加率は14.0%で、減少率を1.8ポイント上回っている。(図1)
2. 「50.0ha」以下の規模階層に属する経営耕地面積の割合は5割を超える。(図2)

増減分岐点を基準とした増加率が減少率を上回っているため、分岐点以下の面積が5割を超えているが、減少率が低い。

図1 階層区分ごとの経営耕地面積の増減率(2010年から2015年)

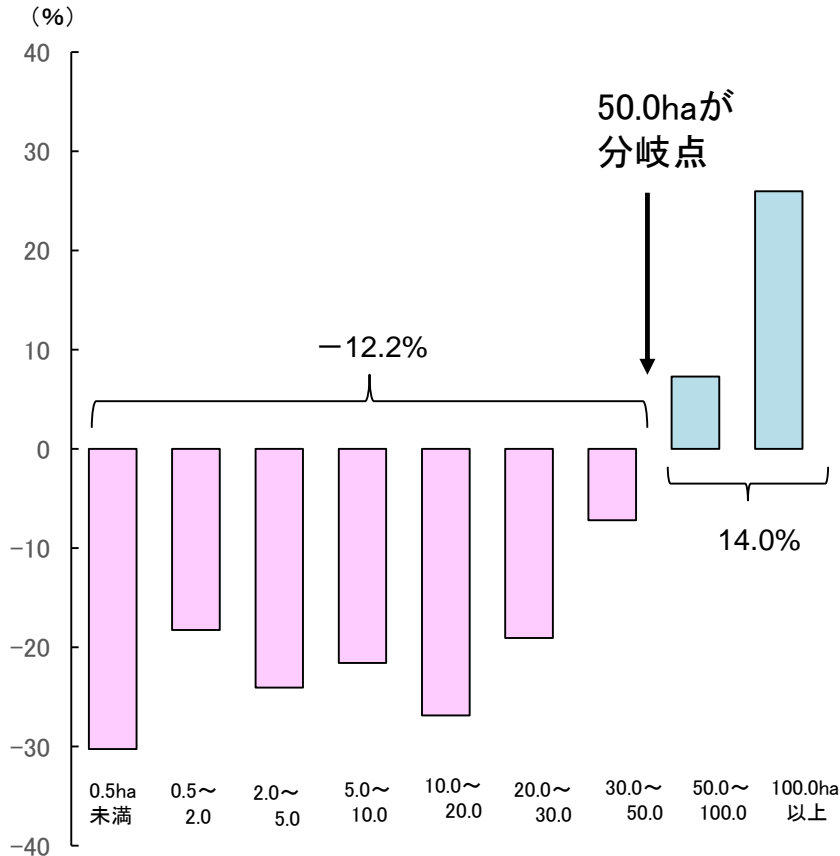
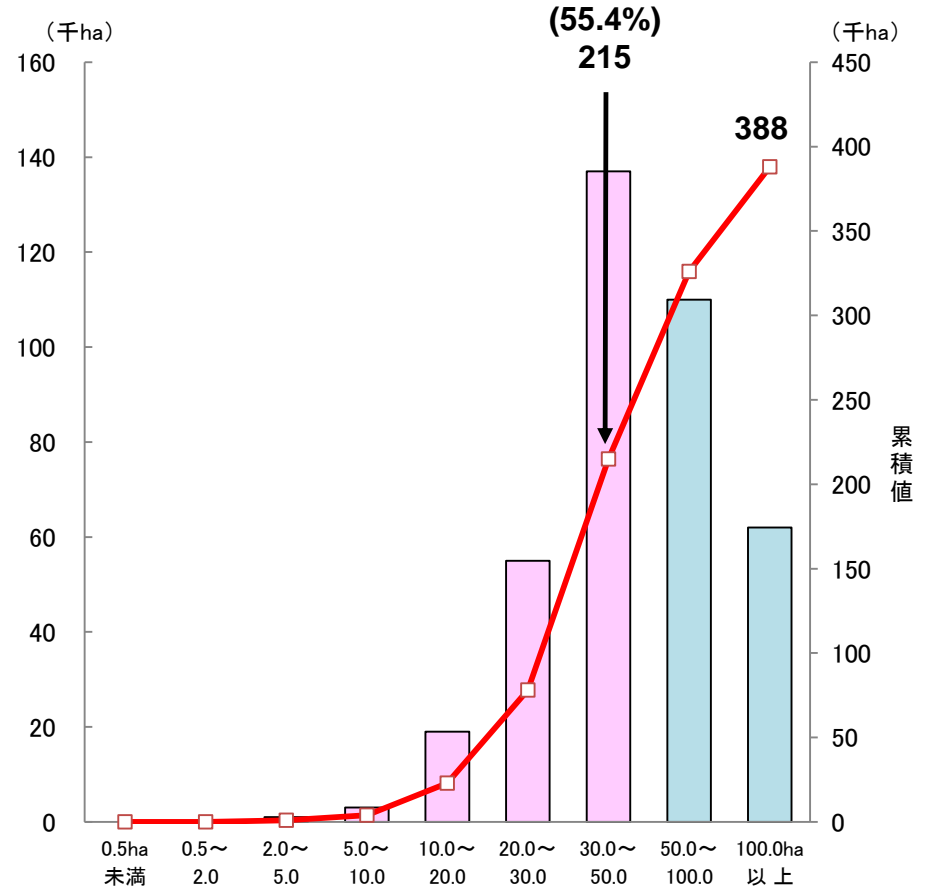


図2 階層区分ごとの経営耕地面積と累積値



－ 2 経営耕地の減少率が地域によって違うのは？ －

2. 増減分岐点からみた増減の特徴(つづき)

－ 道東(酪農)・道北 : 100ha以上階層の増加率が高い －

1. 増減分岐点は「100ha」。分岐点以上の増加率は23.4%で、減少率を6.5ポイントと大きく上回っている。(図1)
2. 「100.0ha」以下の規模階層に属する経営耕地面積の割合は6割を超える。(図2)

増減分岐点を基準とした増加率が減少率を大きく上回っているため、分岐点以下の面積が6割を超えているものの、減少率が低い。

図1 階層区分ごとの経営耕地面積の増減率(2010年から2015年)

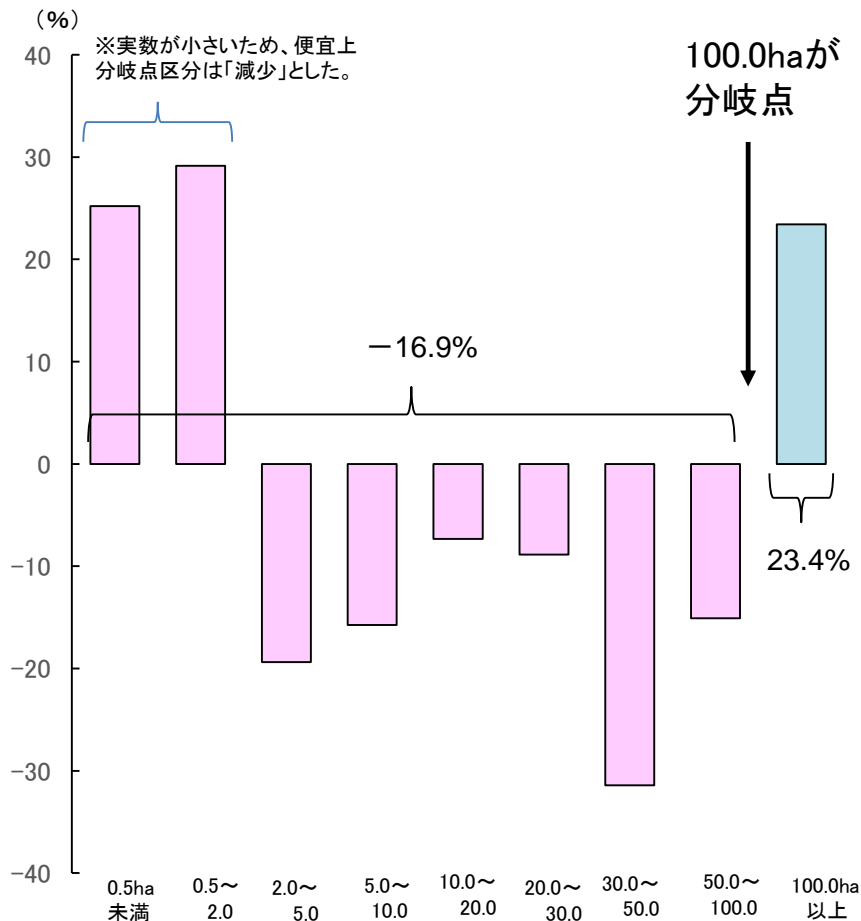
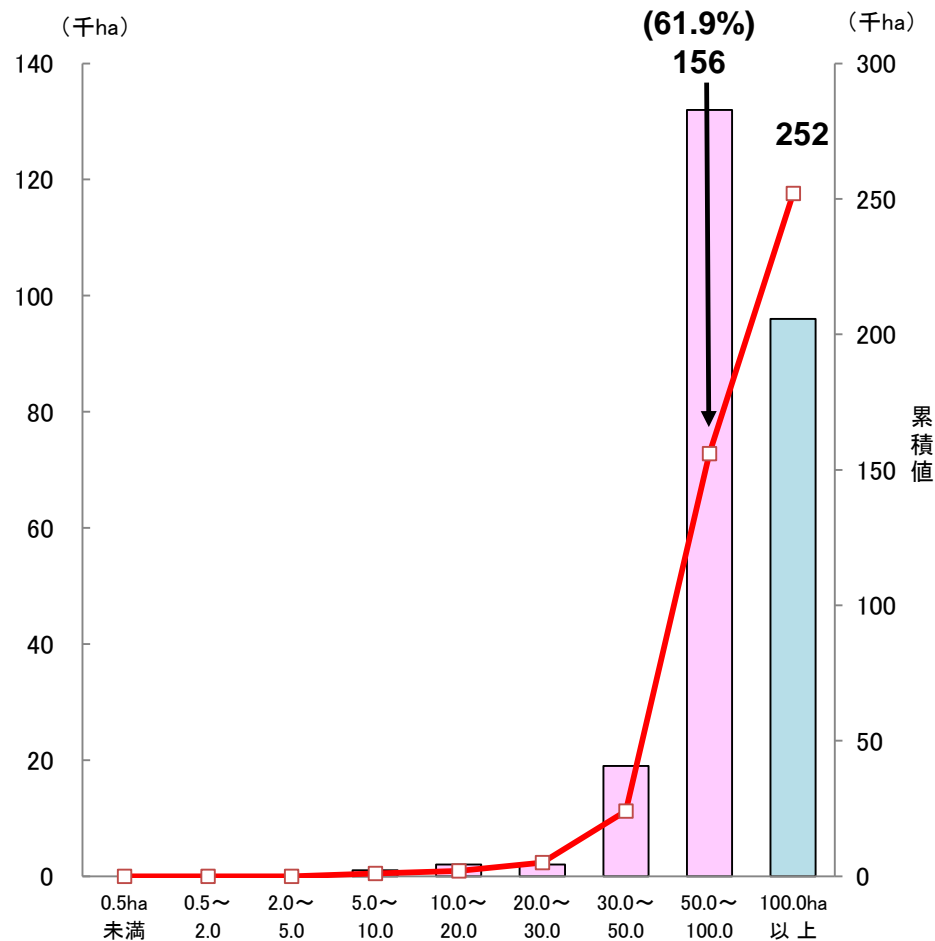


図2 階層区分ごとの経営耕地面積と累積値



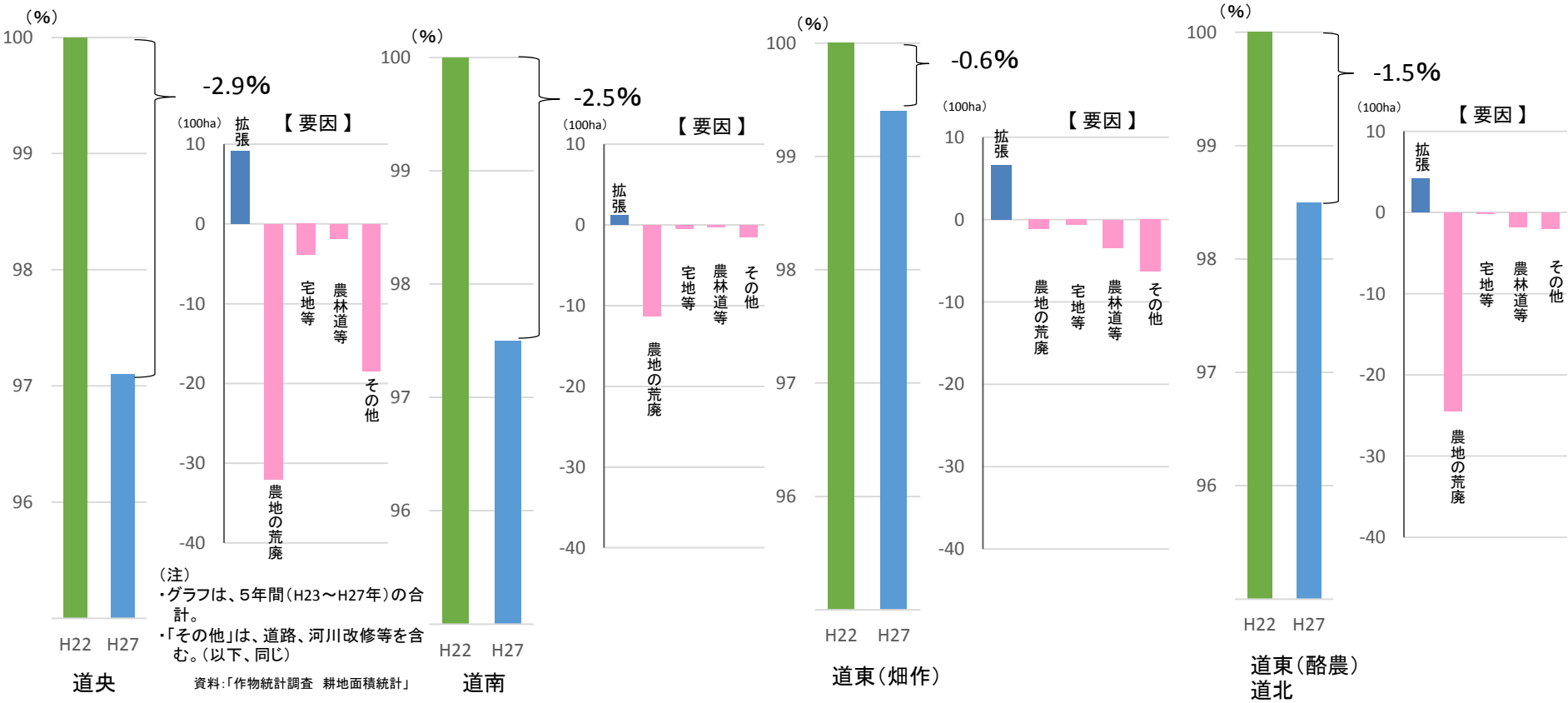
ー 2 経営耕地の減少率が地域によって違うのは？ ー

3. 経営耕地面積の減少要因

ー 最も大きな要因は「農地の荒廃」で、特に、道南と道東(酪農)・道北では80%を越える ー

- 経営耕地面積規模の小さい道央及び道南は、5年前と比べて2%以上減少している。
- 経営耕地面積が減少した要因としては、「農地の荒廃」が最も大きく、特に、道南と道東(酪農)・道北では80%を越えている。これに対し、減少幅が少ない道東(畑作)では、「農林道等」が耕地減少要因の1位となっている。

図 経営耕地面積の減少幅(H22年の経営耕地面積を「100」とした場合)とその要因



II 地域の特徴

まとめ — 経営耕地面積規模の小さい道央、道南では、耕地の減少率が高い —

1. 道央、道南では、農業経営体数の減少が大きく、耕地の減少率も高い。
2. 経営耕地面積規模別の増減分岐点をみると、道央、道南では20～30haであるが、道東(畑作)、道東(酪農)・道北では50～100haとなっている。
3. 全道的には最も大きな減少要因は「農地の荒廃」であるが、経営規模の大きな道東(畑作)では、比較的拡張面積があり、減少要因の主なものは「農林道等」となっている。

以上のことから、経営耕地面積の減少率が地域によって違うのは、経営規模の大小の影響が大きいと考えられ、経営耕地面積規模の小さい道央、道南では減少率が高くなっている。

【道央】

【経営耕地の減少率】 -2.9%

【経営耕地のある農業経営体数の減少率】 -17.0%

【増減分岐点からみた特徴】 20ha以下の減少率が高い

【減少要因】 農地の荒廃、宅地等の割合が高い

【道東(酪農)・道北】

【経営耕地の減少率】 -1.5%

【経営耕地のある農業経営体数の減少率】 -11.3%

【増減分岐点からみた特徴】 100ha以上の増加率が高い

【減少要因】 農地(主に牧草地)の荒廃の割合が高い

【道南】

【経営耕地の減少率】 -2.5%

【経営耕地のある農業経営体数の減少率】 -16.4%

【増減分岐点からみた特徴】 30ha以下の減少率が上回る

【減少要因】 農地の荒廃の割合が高い

【道東(畑作)】

【経営耕地の減少率】 -0.6%

【経営耕地のある農業経営体数の減少率】 -10.6%

【増減分岐点からみた特徴】 50ha以上の増加率が上回る

【減少要因】 農林道等の割合が高い